

東京言語研究所

集中講義のご案内

東京言語研究所では、言語学を研究されている方や言語学に興味をお持ちの方を対象に〔理論言語学講座〕をはじめとして様々な講座を開講しております。〈集中講義〉は、多様な研究の一領域を集中的に学べる講座です。ぜひご参加ください。

〈演題〉 外から見る中国語 内から見る中国語

——中国語・歴史探訪と文法散(三)策——

〈講師〉 **木村 英樹 氏** (東京大学名誉教授)

〈日時〉 2020年3月28日(土) 13:00~18:00 (90分講義×3コマ)

29日(日) 10:30~16:15 (90分講義×3コマ)

〈会場〉 東京言語研究所 (新宿区大久保 6-24-1 新宿TXビル2階)

〈参加費〉 一般 12,000 円

学生・大学院生・2019年度理論言語学講座受講生 9,000 円

〈申込み〉 ホームページ申込みフォームまたはFAXにて下記をご連絡下さい。(定数:50名)

※ 申込み受付は2月3日(月)~3月24日(火)

- ①集中講義受講希望 ②氏名 ③フリガナ ④性別 ⑤住所 ⑥電話番号 ⑦Eメールアドレス
⑧区分 (2019年度理論言語学講座受講生・一般・学生) ⑨所属区分 (大学生・大学院生・
教員・会社員・その他) (上記情報は東京言語研究所事業以外には一切使用いたしません)

講師紹介: 1953年生まれ。金沢大学文学部助教授、神戸大学国際文化学部助教授、東京大学人文社会系研究科教授を経て、現在東京大学名誉教授。著書『中国語ははじめの一步〔新版〕』(ちくま新書)、『ヴォイスの対照研究』(くろしお出版)、『中国語文法の意味とカタチ——「虚」的意味の形態化と構造化に関する研究』(白帝社)等。

○ 問合せ先

公益財団法人ラポ国際交流センター 東京言語研究所

〒169-0072 東京都新宿区大久保 1-3-21 新宿TXビル 2階

TEL:03-6233-0631 FAX:03-6233-0633

E-mail:info@tokyo-gengo.gr.jp ホームページ:<http://www.tokyo-gengo.gr.jp/>

中国語は、地球上のおよそ5人に1人が母語として日常的に用いる言語であり、使用人口に関して言えば、7000種余りあるとされる世界の言語の中で紛れもなくマジョリティに属する言語である。一方、類型論的な観点から見れば、中国語は諸々の点においてマイノリティに属するタイプの言語である。孤立語的であり、単音節的であり、かつ声調言語であるという言語は世界にそう多くはない。SVO型言語であり、かつ前置詞型言語でありながら、前置詞句全体は動詞の前に置かれる、あるいは修飾語は被修飾語の前に置かれるというタイプの言語は少数派に属する。

本講義は二部構成で行う。前半では、類型論的な観点から中国語の歴史のおよび共時的特徴を概観し、後半では、現代中国語および近世中国語における個別の文法現象を取り上げ、文法化およびポライトネスの問題に関心を寄せつつ、孤立語たる中国語の文法的特質の一端を明らかにする。

前半では、まず、先秦時代の上古中国語から現代の中国語に至るまでの歴史的な変遷を概観し、現代中国語の位置を把握する。概観の過程で、従来しばしば指摘されてきた中国語の三大パラメータ——すなわち、1) 孤立語、2) 単音節語、3) 声調言語——について、それぞれの内実を紹介し、中国語に声調が成立するに至った経緯や、声調言語ならではの二音節語の構成法などについても言及する。次に、共時的な観点から、現代中国語の類型論的特徴を、主として語順の問題に焦点を当てて論じる。

後半の文法論では、以下の三つのトピックを取り上げる。

- I. 呼称と人称のポライトネス
- II. 北京官話における授与動詞“給”の文法化について
- III. “笑”の文法化

挨拶表現としての常套語をもたない中国語、あるいは「敬語」という文法範疇をもたない中国語は、日本語話者にとっては兎角「不愛想な言語」と受け取られがちである。しかし、中国語にも中国語なりの対人配慮は存在する。Iでは、呼称や人称表現の対人配慮に関わる機能を語用論、談話文法、構文論の観点から観察し、中国語のポライトネスの一端を明らかにする。

IIでは、“普通話”の基礎方言である北京官話の授与動詞“給”を取り上げる。「(XにYを)与える」という〈授与〉の行為を意味する北京官話の“給”は、文法化を経て、一方では、使役構文の〈被使役者〉をマークする前置詞機能を獲得し、一方では、受動構文の〈動作者〉をマークする前置詞機能を獲得している。この2通りの文法化のプロセスの分析を通して、〈授与〉構文と〈使役〉構文と〈受動〉構文の意味連携のメカニズムを明らかにする。

IIIでは、〈笑う〉を意味する動詞“笑”の文法化に関する問題を取り上げる。近代中国語から現代中国語へと至る過渡期、すなわち近世中国語の時期に成立した「章回小説」には、“笑”という語が高い頻度で用いられる。とりわけ『紅樓夢』においては“笑道”（笑って言う）という動詞の頻度が顕著に高い。その理由を文法化の観点から捉え、加えて、当該の文法化の動機を文法論および文学史の両面から考察する。

なお、本講義は中国語になじみのない受講者が多数参加されることを十分考慮に入れ、中国語初心者にも(も)分かりやすい講義を心掛ける。中国語を知らない方、大歓迎！

28日(土)

- 13:00 講義—1
- 14:30 講義—1 終了 休憩
- 14:45 講義—2
- 16:15 講義—3 終了 休憩
- 16:30 講義—3
- 18:00 講義—3 終了

29日(日)

- 10:30 講義—4
- 12:00 講義—4 終了 休憩 昼食
- 13:00 講義—5
- 14:30 講義—5 終了 休憩
- 14:45 講義—6
- 16:15 講義—6 終了